

## エッセイ

アカデミー賞最年少受賞者

テータム・オニール

太田 義幸

通りすがりの映画好き

学校でもらった割引券で映画を観に行っていた中学生時代。学校からの割引券なので当然に健全な映画のラインナップ。たとえば今回の上映作品が『エマニエル夫人』であり、そのポスターが貼ってあったとしてもごく普通に映画館に入場だ。

観に行った映画はウォルター・マッソーやビック・モローが出演した『がんばれ！ベアーズ』。

この作品は、問題児ばかりを抱えた弱小少年野球チーム「ベアーズ」を、かつてマイナーリーグで活躍していたプールの清掃人・バターメイカー（ウォルター・マッソー）がひよんな事情から率いることになり、彼とチームメイトたちが奮戦しながら勝ち抜いていく姿を描いたコメディである。運動が得意な子供たちが協力して頑張るといふ誠に文部省推薦的な爽やかな作品である。この作品でベアーズの助っ人として途中参加する凄腕ピッチャー役として出演するのが当時13歳だったテータム・オニール。

丸顔でムッチャかわいいとか美人とかではなかったが、親しみ

やすさを感じたのか、または同年代だったこともあったのか、このソバカス顔のテータムがお気に入りになったのであった。そのため、『がんばれ！ベアーズ』が私にとって人生初めて買ったパンフレットとなった。ちなみにそのパンフレットの裏表紙には私の名前が記入してある。なんとカワイイことか。

気に入ったといっても、当時、海外の映画スターの情報の入手手段はごく限られており、私にとって唯一の情報入手手段は「ロードショー」や「スクリーン」の映画雑誌であった。幸いにもテータムは日本人にも人気で、当時は結構掲載されていたのである。テータムの紹介記事を読むと、何と彼女はデビュー作の『ペーパームーン』でアカデミー賞助演女優賞を10歳で受賞しているとのこと。共演は実の父親のライアン・オニール。どんな名優でも子役と動物には勝てないと言われているが、『ある愛の詩』での甘いマスクで多くの女性の心を掴んだライアンでも素直な演技の娘にはかなわなかったと言うことだろう。ちなみに彼女は『ペーパームーン』の撮影前には「2時間の映画は、2時間で撮っている」と思っていたそうである。何ともかわいい話である。

『がんばれ！ベアーズ』の後に出演したのは『ニッケルオデオン』。『ペーパームーン』同様ピーター・ボグダノヴィッチ監督、ライアン・オニール共演のこの作品は、やはり『ペーパームーン』と同様のノスタルジックなおいを感じさせる作品であった。

『ニッケルオデオン』の次の作品が『インターナショナル・ベ

ルベット 緑園の天使』。エリザベス・テラー主演作『緑園の天使』の続編でなことだが、今はなき桑名キネマでの鑑賞。とりあえずテータムのファンを自称する私は映画館にカメラを持ち込みテータムの雄姿をパチリパチリと撮ったものだ。当然、今は（昔でもそうか）映画泥棒としてお縄になり、「10年以下の懲役」か「1千万円以下の罰金」またはその両方が科せられることになるところだが、当時、それを見咎める人もいなかった。と言うか、そんなテータムの映画に観客もいないって状況でした。

彼女の作品のうち最後に観たのは『リトル・ダーリング』。彼女が主演する最後の作品である。共演は当時アメリカのテレビのシリーズもので人気だったクリステイ・マクニコル。彼女は50歳の時に同性愛をカミングアウトしているが、実はテータムも数年前に米ピープル誌のインタビューで、「女性が好きで、最近はおっぱら女性とデートしている」ことを明かしている。ただし『リトル・ダーリング』の際に二人に何かあったと考えるのは早計である。テータムは泣く子も踊るマイケル・ジャクソンと付き合い合っていたという話もあり、また、泣く子も驚くテニス界の暴れん坊ジョン・マッケンローと結婚し3人の子供を授かったのだから。

そのマッケンローとは離婚するのだが、その時にテータムはヘロイン中毒だったので、3人の子供の養育権はマッケンローが持つことになった。何とも残念な話だが、実は彼女の母親のジョアンナ・ムーアも薬物中毒の頃があり、また母親だけではなく、実

の弟も、腹違いの弟も、さらに彼女の父親のライアンも、そしてさらにさらにテータムの息子も薬物所持で警察の世話になっている。

何とも薬漬けの一族であり、『キングスマン ゴールデン・サークル』でジュリアン・ムーア（なんとテータムの母親に激似の名前！）が演じた悪者は世界中の麻薬使用者を抹殺しようとしたが、ジュリアン・ムーアにかかるオニール一家は滅亡してしまうところである。

50歳を過ぎたテータムは、今や主演で映画に出ることはないが、それでもテレビシリーズなどに出演しているようである。やはり演じることをやめることはないのだろう。なんせ10歳の時に受賞したアカデミー賞の最年少記録は40年過ぎた今でも破られてはいないのだから。



ペーパームーン

## 私を新幹線でスキーに連れてって

田中 忍 三重フェス会長

昨年末、上京をした際、JR駅構内で、映画『私をスキーに連れてって』のポスターが何枚も貼ってあるのを見つけた。初々しい十代終わりの原田知世が白いスキーウェアに白い帽子をかぶり、口を半開きにしてこちらを見つめている。写真ではなく手描き映画看板のような雰囲気のデザインである。一昨年前の2016年に角川映画40周年を記念する上映会や展示があったから、今度は、ホイチョイ・プロダクション製作の3部作、『私をスキーに連れてって』（1987年）、『彼女が水着にきがえたら』（1989年）、『波の数だけ抱きしめて』（1991年）をリバイバル上映するのでないかと想像しながら、足早に先を急いだ。

その日、東京・神保町シアターで開催される『私をバブルに連れてって』(バブリー映画特集)のチラシを見つけた。本作のほか、『愛と平成の色男』（森田芳光監督、1989年）、『就職戦線異状なし』（金子修介監督、1991年）、『怪盗ルビィ』（和田誠監督、1988年）、『君は僕をスキになる』（渡邊孝好監督、1989年）が上映されること。「そうか、平成の初め、バブル期に作られた映画も30年経つのか。東京は相変わらずいろいろな映画が映画館で上映されているなあ。」と思いながら、学生時代、

映画がたくさん観られる東京の生活に憧れた自分を思い出した。

昨年、大阪府登美丘高校ダンス部が「バブリーダンス」を踊っている映像がYOU-TUBEに公開され、その再生回数が驚異的な数字を示している。原稿を書いている1月30日の深夜では、4299万回の再生回数になっているからビックリだ。バブル景気は一般的に、1986年末から1991年2月までの4年余りの株式と不動産価格の超高騰期をいう（「東京バブルの正体」昼間たかし著）。バブル期に流行した厚化粧と前髪カール、それに肩パット姿でバブルを知らない高校生たちが踊っている。彼女たちは、バブルメイクをすることで、30年前にタイムスリップし別人になれるのだろう。

本年1月14日、朝日新聞朝刊で特集記事「平成経済 180度変わった30年、ホイチョイと漫画で振り返る」と題し、ホイチョイ・プロダクションズ（いつの間にか「ズ」が付いている）代表の馬場康夫氏が、バブル期について語っていた。馬場氏は現在63歳、冒頭の3作品で監督を務めた。

この記事を読むと、私が昨年末に見たポスターは上映の告知ではなかった。あれは、本稿のタイトルで記すように、JR東日本が国鉄民営化と『私をスキーに連れてって』映画公開30周年を記念し、『JR SKISKI』キャンペーンに起用したものだ。JR東日本ホームページには、全28種類のCMが公開されている。映画の中で使われたシーンを切り取ったり、同じシーンをリフレ

インさせたりして15秒にまとめ、ややとぼけたセリフを、現在の原田知世と三上博史がアテレコをし、映画と同じようにユーミンの歌「BLIZZARD」を流している。このCM群を見て懐かしいという感じもあったが、映画はどのような内容だったか、まるで覚えておらず、「このようなシーンがあったのかな？」と首をひねるばかり……。タイミングよく、このキャンペーンに便乗してか、日本映画専門チャンネルが昨年12月から今年1月にかけて、数回、本作を放送したので再見した。

当時は、既に角川映画が公開され、日本映画にもポップさが加わっていたが、肩の凝らない若者向けの映画は作られていなかった。バブルで若者はスキーやクルマに興じていて、その時期に流れていたユーミンの曲を流し『私をスキーに連れてって』は製作された。この映画は若者の心をとらえ、大ヒット。スキー人口も増加した。またこの映画がきっかけになり、テレビでは『抱きしめたい!』（1988年）『東京ラブストーリー』（1991年）をはじめとするトレンドイドラマの製作も進んだ。

『私をスキーに連れてって』という映画は時代の産物だと思っている。ストーリーは私の様に記憶に残らなくても、映画の中に時代が描かれ、バブルを語る時、必ず引用されるだろう。

今の日本映画は、30年前に比べると堅苦しさを覚える。評価の高い映画は、こぞって「監督が魂を込め、息つく余裕がなかつ

たり、スタイリッシュで優等生”のものに思え、観終わった後、疲労が伴う。それはそれで見ごたえがあり良いと思うのだが、今年還暦となる私は、もう少し肩の力を抜き、ほっこりしてユーモアがある気楽に観られる映画が作られてもいいのと思う。だから、『男はつらいよ』シリーズが面白くて、涙している昨今である。それとも、『男はつらいよ』が身にしみる年齢になったということかもしれないが……。



ランプ式幻灯機  
シネマ・ミュージアム(スペイン)